

文化班 池田菜穂(防災科学技術研究所) ドムカル村における牧畜調査

2009年8月9日、ラダックの中心都市レーを出発してドムカル村に向かった。同村には、同年3月に3泊4日の短い日程で初めて訪れているので、このときは2回目の訪問であった。ラダック地方で、私は、地域住民の災害に関わる認識と災害への対応について、災害と生業活動との関係を重視しながら研究しようとしている。今夏は、ドムカル村の牧畜による放牧地利用や世帯経営の現状について調べるために、高所放牧地に滞在中の牧者たちを訪ねることにした。ここでいう高所放牧地とは、ドムカル上村にあたるゴンマ村の集落のなかでも最も高所に位置するクラムリック（標高約4,100m）のさらに上流の主谷及び支谷に沿って広がる草地のことである。

ドムカル村の現行の牧畜にみられる異なる放牧パターンのなかで移動牧畜の要素があり高所放牧地を利用するものについて、3月の調査結果やラダック研究のメンバーからの情報をもとに、次のような二種類を事前に想定していた。一つは、クラムリックに住居をもつ一部の世帯が、主にディモ（雌ヤク）・ゾモ（ヤクウシ雑種の雌）からなる家畜群を連れて高所放牧地に滞在するパターンである。もう一つは、ドムカル下村にあたるド村（約2,900m）などに住居をもつ一部の世帯が、周囲の世帯から山羊・羊の委託放牧を請け負って高所放牧地付近まで上がってくるパターンである。今回は、結果的に、後者については情報を集める機会があまりなく、前者についての調査が中心になった。

今夏、ゾモなどウシ属の家畜を連れて高所放牧地に滞在した牧者たちは全部で5世帯。クラムリック集落に住居をもつ3世帯がスパンクルという宿营地（標高約4,400m）に、ゴンマ村の中心部と下部の集落に住居をもつ2世帯がララスという宿营地（約4,500m）に、それぞれ滞在した。滞在期間は7月半ばから9月半ばまでの2ヶ月間とのことで、私が訪問したのはちょうど1ヶ月を過ぎた時期だった。私は上述の宿营地2カ所に4泊ずつ滞在させてもらい、搾乳量を計りな

がら家畜の種類や頭数を記録し、乳加工品の生産量を計量し、世帯経営のこと、放牧地での災害のことなど聞き取りを行った。

調査結果から興味深い事柄の一つを紹介したい。それは、高所放牧地で5世帯が搾乳していた家畜の頭数に、他世帯から委託された家畜が占める割合が、牧者自身が所有する家畜の割合よりも大きかったことである。具体的には7割（5世帯の平均）が他世帯の家畜であった。例えば、ある世帯では、14頭のうち4頭だけが自分の世帯の所有で、残りの10頭は委託されたものだった。また、搾乳されていない家畜を含めた雌のウシ属家畜所有の総数が、1世帯あたり9-10頭（5世帯の平均）と少なめであったことから、高所放牧地で夏期の放牧活動に従事している世帯ですら小規模家畜群しか所有していないことが分かる。一方、家畜を委託する際の生産物の分配については、委託される側に有利な条件になっているという印象だ。積極的に放牧地に滞在したがる牧者が少ないことが、住民の共通認識になっているためだろうか。

高所放牧地やクラムリック集落では、野生のオオカミやユキヒョウの襲撃による家畜被害も頻繁に発生しているとみられ、特に放牧地における災害としては生活への影響が最も大きなものと言えるだろう。今のところは細々と続いている牧畜の将来を考えるにあたり、気がかりな事柄の一つである。



調査に協力して下さった牧者の一人。これから天日に干してつくる乾燥チーズ（チュルピー）を形作り並べているところ。手だけを使い、とても器用に棒状の形を作る。（ララスにて）

生態班 加藤真(京都大学)
ラダックとザンスカールの自然

2009年9月1~21日まで、インドのジャンムー・カシミール州とヒマチャールプラデーシュ州の各地をめぐり、ヒマラヤ生物の自然を見る機会を与えていただいた。同行させていただいた山田勇・平田昌弘先生と、辺境の悪路を心強い運転で走破して下さったタルケイさんに深くお礼を申し上げたい。

ジャンムー・カシミール州のラダックとカシミールは、ヒマラヤ高地の中でもとりわけ乾燥した地域である。岩肌が露出する山ひだの中であって、緑は谷筋にそってのみ出現する。伏流水に根を浸して育つヤナギ属とドロノキ属の植物が数少ない自生樹木である。外生菌根性の植物として著名な、マツ科、ブナ科、カバノキ科の植物をこの地域で1本も見なかったことは、この地域の土壌がいかに乾燥しているかを示している。

ラダックの季節は初秋。どこの村でもオオムギの収穫に忙しく、畑を取り囲む礫がちの荒原では、ミソガワソウ属、アキギリ属、イヌゴマ属、エゾヨモギギク属、アザミ属、ヒゴタイ属などの草本の花が咲いていた。少しでも緑があるところには、ヤクやウシ、ヒツジ、ヤギなどが草を採食しているため、そこに生えている植物は、採食を受けつつもそれに耐えて育つイネ科などの草本か、強力な棘や毒で採食を免れている草本のどちらかであることが多い。高山帯であることを反映して、訪花昆虫で最も目立つものはマルハナバチ類であった。

ザンスカールは、雪を頂く5,000m級の山々と、切り立った峡谷に囲まれて、長い間、イスラム勢力など外部からの侵略を受けず、チベット仏教文化が古い形のまま残された地域として知られる。

ザンスカールをめざして、スル渓谷に沿った悪路を登って行くと、そこには美しい草原が広がっていた。ラダックよりもわずかに雨量が多いせいかな、谷はより青々としており、ヌン峰とクン峰の山塊より氷河がスル谷のすぐ近くまで流れ落ちている。湿った礫がちの斜面には、リンドウ属やセンブリ属の花が咲いており、湿地には矮性のトリカブトが咲いていた。これらの花に訪花するのは、決まって数種のマルハナバチである。ペンジ峠付近では青いケシ (*Meconopsis aculeata*) やオオヒエンソウも咲いていた。また、この谷のタンポポはみな在来種で、セイヨウタンポポは1株も見えない(ラダックの道路沿いにはかなり帰化が進んでいる)。谷すじの草原では、伝統的なヤクの放牧と乳搾

り、バターやチーズ作りの光景が見られる。山の急斜面を見上げると、ヤクのフンを集める人々や、飼料用にオヤマソバの1種 (*Aconogonon tortuosum*) を刈り集める人々が見えた。

ザンスカールの中心地パドゥムは、広いU字谷の一面にあり、谷を隔てた対側にザンスカールで最も大きなゴンパであるカルシャゴンパがある。ゴンパの門に飾られていたのは、チベットオオカミとブルーシープの頭であった。

パドゥムからドダ川を下ってゆくとザンラ村がある。ここにはかつてのザンスカール国の宮殿があった。周囲の乾燥した山麓にはマオウが多く、赤く甘い種子をたくさんつけていた。マオウには交感神経刺激物質であるエフェドリンが含まれており、薬としてよりは毒として、人々には認識されているようだった。

ザンラの南にはトンデ村があり、そこから見上げる切り立った丘の上にトンデゴンパがある。このゴンパは訪れる観光客もほとんどいないのであろう、僧たちの顔は信心深く、慎み深く、チベット仏教がまだ人々の生活とともにあり、心の中に生きているように感じた。不思議な笑みをたたえたさまざまな仏や神の像がたちならぶ薄暗い講堂には、たくさんの僧がかなでる読経と鉦の音が響き、古い写真に見る1世紀前のラサのポタラ宮を彷彿とさせた。

ゴンパから見下ろす谷間には、オオムギ畑が広がっており、オオムギを収穫する人々の姿が見える。オオムギの刈り取りが終わった人々は、山や牧草地での牧草集めに余念がない。冷たい風に吹かれて、チョウゲンボウが空を滑空している。高山の一瞬の夏をザンスカールの人々は享受して、すでに冬支度にとりかかっているのだった。



ザンスカールの結実したマオウ

生態班 ■ 小林尚礼(小林写真事務所) ラダックにおける住民撮影と聖地調査

7月14日からの1ヶ月間、ラダックのドムカル村を中心に北インドのチベット文化圏を訪ねました。住民撮影と聖地の聞きとりを目的とした調査は、以下の3テーマに分かれます。約1万枚の写真を撮影するとともに、この地域の聖地の概要を確認しました。

①ドムカル村の住民撮影 (7/17~7/28)

ドムカル村の医学調査に同行して、テント村の脇に簡易な撮影スタジオを作り、全受診者306名の肖像写真を撮影しました。その意義は、写真をカルテに利用することともに、変化し始めたドムカル村を人間の姿を通して記録することにあります。

撮影と同時に、人生で大切なことや心配事などについて質問しました。大切なことは宗教や家族という回答のほかに、「教育」が目立ちました。心配事では「お祈りの時間が足りない」が多くありました。価値観や生活が変わりつつあることが窺えます。質問はわずか5分程度ですが、その人らしい表情を撮らせてもらうには、顔を合わせて話をすることが重要です。

村には伝統的な身分階級が今も残っていますが、同時にユラ(村の神)やナンラ(家の神)などの神の体系も、中国よりはっきり残っているようです。今後、調べてゆきたいテーマです。

②ドムカル谷上流部の探査 (7/29~7/31)

村人とともにドムカル谷の上流ヘトレッキングに出かけ、村の聖地とされるゴンパ・ランジョンを訪ねました。それは多数の球形の小岩石が埋めこまれた大岩で、球状花崗岩によるものではないかと推察されました。村人は1年に1回この岩をお参りします。ある村人は「ランジョンにお祈りすれば心配事は何もない」と言いました。奇妙な岩ですが、地球の歴史を畏敬するともいえる行為には、考えさせられます。

ドムカル谷の上流は広いU字谷で、両岸にサイドモレーンが連なり、その山側に踏み跡がつけられています。乾いた谷ですが、標高4,500mあたりから谷底の草がやや増えて、放牧地もそこから上流に見られます。ちょうど高山植物の開花の時期で、4,800mあたりまで様々な花が咲いていました。本流の源頭には村人も知らない氷河湖があり、将来の決壊が心配されました。

③ラダック周辺の聖地調査 (8/1~8/14)

ドムカルからヒマラヤ山脈を越えてダラムサラまで車で走り、この地域の聖地や巡礼地に関する調査を行いました。チベットほど聖地は多くありませんが、注

目したいのはラホール地方にある仏教の聖山ティブリ(5,769m)と、キナウル地方にあるヒンドゥー教の聖山キナウル・カイラス(6,050m)です。どちらも山塊を一周する巡礼路があります。今後この2つを調べると共に、ザンスカールの聖地を踏査したいと思います。



写真1 医学調査受診者の肖像写真(2009年7月。小林尚礼撮影)



写真2 ドムカル谷の源頭と氷河湖(2009年7月。小林尚礼撮影)



写真3 ラホール地方の聖山ティブリ(2009年7月。小林尚礼撮影)

■ 統括班 ■ 野瀬光弘(総合地球環境学研究所)
高所プロジェクト国際会議プログラム

12月3日(木)

9:30-9:35 Opening remarks: Narifumi Tachimoto

9:35-9:40 Introduction: Okumiya Kiyohito

9:40 -10:55

Session1 Physiological adaptation to
high-altitude environments

Kozo Matsubayashi, Ge Ri Li, Kuniaki Otsuka
(Moderator: Kiyohito Okumiya)

11:00-12:40

Session2 Cultural and ecological aspects of
high-altitude environments

Shinya Takeda, Akiyo Yatagai, Sonam Jorgyes,
Tetsuya Inamura,
(Moderator: Masayoshi Shigeta)

12:40 -14:00 LUNCH

14:00 -15:40

Session3 Medical reports from Ladakh, Qinghai
and Arunachal

Motonao Ishikawa, Shun Nakajima, Reiko Hozo,
Yumi Kimura, Dani Duri, Yasuko Ishimoto
(Moderator: Kozo Matsubayashi)

15:45-17:00

Session4 Reports from the scene: problems facing
residents

Rinchin Tsering & Yasuyuki Kosaka, Biruh

Alemu, Kazuo Ando

(Moderator: Tetsuya Inamura)

12月4日(金)

9:00-10:40

Session5 Changing lifestyle and human
well-being

Kiyohito Okumiya, Patricia Garcia, Tsering
Norboo, Toshihiro Tsukihara
(Moderator: Shinya Takeda)

10:45-11:55

Free Discussion: Challenges for the future in
the highlands

(Modelator: Toshihiro Tsukihara)

11:55-12:00

Closing remarks: Kiyohito Okumiya

■ 写真 ■



月夜のラダック・ドムカル上村。夜景を撮る場合、地上を照らす月明かりが必要だ。暗い夜ほどではないが、ドムカルの空には多くの星が輝いていた。民家から電灯の光が漏れるのは、ここ数年の新しい風景。(2009年7月小林尚礼撮影)